

「小さなワタシの日」

太陽が嫌いだった。  
人ごみが嫌いだった。

喧騒が嫌いだった。

だから、「二階」を憧れることはなかった。

そんなふうには、ずっと眠ったきりのお婆さんは言っていた……。

私にはわからない。

その言葉の意味も、そういう言葉が出てくることさえも。

いつも、お婆さんは「嫌い」なんて言わなかった。

ただ、この時は「嫌い」を言い続けた。

私はお婆さんが少し「キライ」になった。

私の家は、きつと誰かの家であり、誰の家かも分からない……実際には、私しか使っている人間がないという、家。

お婆さんと一緒に毎日を過ごしていた頃も、私とお婆さんしか使っていないように思える。

私の家の場所は日々変わる。

歩き続けて、どこからも太陽が射さなくなると、そこで立ち止まった位置が今日の家になる。

どれも小さくて、何もないけれど、だからこそ安心できる家。

その家で起きて、その家から歩いて、ある家で食べて、ある家で寝る。

毎日その繰り返し。

私の家は、本当にたくさんある。

でも今ではどの家がどこにあるか、その道のりが頭の中に入っている。

家は毎日変わるけれど、毎日通う家もある。

その家では、お婆さんがずっと眠っている。

私は、朝起きたらそこへ行く。

今朝は、少しまぶしかつた。

だから、家の左側の壁に一つ「×」を彫る。

それからこう言う……。

「今日は嫌いな日だよ」……今日も返事はない。

それから、反対側の壁に「・」を彫る。

これはお婆さんがやっていたから、私も真似をしているだけ。

お婆さんは、「この「・」を「ヨヨシ」と言っていた。

それから、今を知る為にこうして彫っている、とも……。

私には分からない。

でも、毎日彫り続けている。

きつとこれからも、忘れることはない。

いつか私にも分かる日が来るだろうか……。

今日もまた友達ができた。

勝手だつたけれど、「フィズ」という名前を付けた。

見つけたのは、川をはさんでちょうど反対側の家。

思ったより凶暴で、差し出した手に噛み付いてきた。

「私は食べ物じゃないよ」

言っても通じないのは分かっている、いつもそう思う。

でも、何となく言ってみたかった。

友達になるんだから、分かり合わないと。

それから、フィズは本当におとなしくなった。

「これで友達だね」

フィズを撫でながら、少し嬉しくなった。

火をおこしながら、少し悲しくなった。

今日はお婆さんの家の左側の壁にも「○」が彫れそう。

今日は太陽は射していない。

でもかわりに、「ワタシ」が降ってきた。

小さな「ワタシ」は、次々と私に落ちてくる。

私はお婆さんの家まで走った。

家に入って、奥の壁に大きく「○」を彫る。

十三個目の「○」だった。

亡くなる前、お婆さんは言っていた。

寒くなつて、白い「お前」が降ってくる。

そうしたら、自分で「○」を書きなさい、と。

お婆さんは、この日を「私の日」にしてくれた。

私の日には、いつもお婆さんが歌を歌ってくれた。

それは不思議な歌。

でも、とても安らぎのある歌。

くメリークリスマス

くメリークリスマス

お婆さんが歌っていた通りに歌ってみた。

でも、お婆さんは起きない。

もう、本当の歌は聴けない。

もう、私の日を認めてくれる人はいない。

もう、私の日を祝ってくれる人はいない。

私は家を出た。

また一人になつてしまった。

私は少し悲しくなった。

それでも、歩き続けた。

ふと、目に何かが入った。

それは冷たくて、私が泣いていないのに涙を流させた。

「二階」を見上げた。

降ってきたのは「ワタシ」だった。

「涙はいらないよ」

「ワタシ」に言った。

それでも、「ワタシ」は降ってくる。

手に落ちて、溶けては、また降ってくる。

私は「ワタシ」を握り締めた。

少し冷たかった。

少し暖かくなった。

少し嬉しくなった。

ありがとう、祝つてくれて……。。